

ギリシア・ローマ 神話

付 インド・北欧神話

ブルフィンチ 作

野上弥生子 訳

岩波文庫
赤 225-1



ギリシア・ローマ^{しんわ}神話

1978年8月16日 改版第1刷発行 ©
1990年11月15日 第23刷発行

訳 者 の 野 上 弥 生 子

発行者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

定価はカバーに表示してあります

印刷・精興社
製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-322251-2

岩 波 文 庫

32-225-1

ギリシア・ローマ神話

付 インド・北欧神話

ブルフィンチ作
野上弥生子訳



岩 波 書 店

THE AGE OF FABLE
1855

Thomas Bulfinch

目次

『伝説の時代』序……………夏目漱石……………三

ギリシア・ローマ神話

第一章 概説……………	一九
ローマの神々……………	二八
第二章 プロメテウスとパンドラ……………	三一
第三章 アポロンとダフネ……………	四〇
ピュラモスとティスベ……………	四四
ケバロスとプロクリス……………	四七
第四章 ヘラとイオ……………	五一
カリスト……………	五五
アルテミスとアクタイオン……………	五七
レトと里人……………	六〇

第五章	パエトン	六
第六章	ミダス王	七
	バウキスとピレモン	七
第七章	プロセルピナ	八
	グラウコスとスキュラ	九
第八章	アプロディテとアドニス	九
	アポロンとヒュアキントス	九
	ピュグマリオン	一〇
	ドリュオペ	一〇
第九章	ケユクスとハルキュオネ	一〇
第十章	ウエルトゥムヌスとポモナ	一一
第十一章	エロス(クビド)とプシュケ	一二
第十二章	カドモス王	一三
	ミュルミドン	一三
第十三章	ニソスとスキュラ	一四
	エコーとナルキッソス	一四
	クリュティエ	一四
	ヘローとレアンドロス	一五

第十四章 アテナ・・・・・・・・・・・・・・・・一五二

ニオベ・・・・・・・・・・・・・・・・一五六

第十五章 白髪のおとめグライアイ・・・・・・・・一六一

ペルセウスとメドゥサ・・・・・・・・一六一

ペルセウスとアトラス・・・・・・・・一六二

海の怪物・・・・・・・・一六四

結婚の祝宴・・・・・・・・一六六

第十六章 巨神・・・・・・・・一六九

スピュクス・・・・・・・・一七〇

天馬とキマイラ・・・・・・・・一七二

ケンタウロス・・・・・・・・一七四

ピグミ・・・・・・・・一七六

グリフィン、またはグリュポン・・・・・・・・一七七

第十七章 金毛羊皮・・・・・・・・一七八

メデイアとアイソン・・・・・・・・一八三

第十八章 メレアグロスとアタランテ・・・・・・・・一八八

アタランテ・・・・・・・・一九三

第十九章 ヘラクレス・・・・・・・・一九六

第二十章

ヘベとガニメデス……………103

テーセウス……………104

オリュンピア競技……………110

ダイダロス……………111

カストルとポリュデウケス……………113

第二十一章

ディオニュソス……………116

アリアドネ……………117

第二十二章

田園の神々……………118

エリュシクトン……………119

ライコス……………120

水の神……………120

ポセイドン……………121

アンピトリテ……………121

ネレウスとドリス……………121

トリトンとプロテウス……………121

テティス……………121

レウコテアとパライモン……………121

カメナ……………121

第二十三章

風の神 二三四

アケロオスとヘラクレス 二三五

アドメトスとアルケステイス 二三八

アンティゴネ 二四〇

ペネロペ 二四三

第二十四章

オルペウスとエウリュディケ 二四五

蜜蜂飼いアリストaios 二四九

神話の詩人音楽者 二五二

アンピオン 二五三

リノス 二五三

タミユリス 二五四

マルシュアス 二五四

メランプス 二五四

ムサイオス 二五五

第二十五章

史上の詩人 二五六

アリオン 二五六

イビュコス 二六〇

シモニデス 二六四

第二十六章

サッポ 二六六

エンデュミオン 二六七

オリオン 二六七

エオスとティトノス 二六九

アキスとガラテイア 二七一

第二十七章

トロイア戦争 二七四

『イリアス』 二七八

第二十八章

トロイア陥落 二九五

メネラオスとヘレネ 三〇〇

アガメムノンとオレステスとエレクトラ 三〇一

第二十九章

オデュッセウスの冒険(『オデュッセイア』) 三〇五

スキュラとカリュブデイス 三二三

カリュブソ 三二五

第三十章

パイアキア人(『オデュッセイア』) 三二七

求婚者たちの最期(『オデュッセイア』) 三三五

第三十一章

アエネアスの冒険 三三〇

デイド 三三五

バリヌルス 三三七

第三十二章	下界	三四〇
-------	----	-----

エリュシオン(極楽浄土)	三五〇
--------------	-----

シビル	三五〇
-----	-----

第三十三章	アエネアスのイタリア到着	三五三
-------	--------------	-----

ヤヌスの門	三五五
-------	-----

カミラ	三五六
-----	-----

エヴァンデル	三五七
--------	-----

幼いローマ	三五八
-------	-----

ニススとエウリュアルス	三六一
-------------	-----

メゼンティウス	三六四
---------	-----

パラス、カミラ、トゥルヌス	三六六
---------------	-----

第三十四章	ピュタゴラス	三六九
-------	--------	-----

シュパリスとクロトン	三七二
------------	-----

エジプトの神々	三七三
---------	-----

オシリスとイシス	三七四
----------	-----

神託	三七六
----	-----

トロポニオスの神託	三七八
-----------	-----

アスクレピオスの神託	三七九
------------	-----

第三十五章

アピスの神託 三八〇

神話の起原 三八一

神々の像 三八三

オリュンポスのゼウス 三八四

パルテノンのアテナ 三八四

メデイチのウエヌス(アプロディテ) 三八五

ペルヴェデレのアポロ(アポロン) 三八六

ラ・ビシュのディアナ(アルテミス) 三八六

神話の詩人 三八七

ホメロス 三八七

ウエルギリウス(ヴァージル) 三八八

オヴィディウス(オヴィド) 三八九

第三十六章

後代の怪物 三九一

ポイニクス(不死鳥) 三九一

コッカトリス、あるいはバジリスク(王蛇) 三九三

ユニコーン(一角獣) 三九六

サラマンドラ(火蛇) 三九七

第三十七章

東方神話、ゾロアスター 四〇〇

インド神話 四〇一

ヴィシュヌ 四〇二

シヴァ 四〇四

ジャッガーノート 四〇四

階級制 四〇五

仏陀 四〇八

グラント・ラマ 四一〇

プレスター・ジョン 四一一

第三十八章 北方神話 四一二

ヴァルハラ宮殿の歓楽 四一五

ヴァルキリオル 四一六

トールおよびその他の神々 四一六

ロキとその子孫 四一七

トールが山の巨人に賃銀を支払ったこと 四一九

トールが槌を取り返したこと 四二一

第三十九章 トールが巨人の国ヨーツンハイムを訪ねたこと 四二四

第四十章 バルズールの死 四三三

バルズールの葬い 四三七

妖精・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四三八

ラグメロックすなわち神々の終滅・・・・・・・・・・・・・四三九

ルーン文字・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四四一

スコールド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四四二

アイスランド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四四二

第四十一章 ドルイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四四四

アイオナ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四四八

付 録 ギリシア神話系譜(一)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四五三

ギリシア神話系譜(二)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四五五

巻末に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四五七

改版にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・四五九

索引

『傳説の時代』序

私はあなたが家事の暇を偷んで『傳説の時代』をとろ／＼仕舞迄譯し上げた忍耐と努力に少からず感服して居ります。書物になつて出ると餘程の頁數になるさうですが嘸骨の折れた事でせう。原書は私の手元にもあるから承知してゐますが、一寸見ると四六版の小形の冊子に過ぎませんけれども、活字は細かし、上下は詰つてゐるし、讀むのにさへ随分の時間は懸ります。況して一行毎に譯して行くとなつたら、それを專業にする男の手でもさう容易くは出来ません。況して夫の世話をしたり子供の面倒を見たり弟の出入に氣を配つたりする間に遣る家庭的な婦人の仕業としては全くの重荷に相違ありません。あなたは前後八ヶ月の日子を費やして思ひ立つた翻譯を成就したと云つて寧ろ其長きに驚ろかれるやうだが、私は却つて其迅速なのに感服したいのです。

出版に就て私の序文が御入用だとの仰は謹んで承りましたが、私はあらゆるミスに就て何事もいふ權利を有たない無學者なのだから少からず困却します。私は希臘の神話に就いて、あそこを少し、こゝを少し、と云つた風にうる覺えに覺えてはゐますが、系統的には研究もせず、批判もせず、漫然と今日迄經過して來た事を、今日あなたの前に自白しなければならなくなりました。あなたの御譯しになつた原書は、今でもちゃんと私の書架の中に飾つてあります。それを買つたのは何時の頃の事か覺えてゐない位ですから定めし古い昔だらうと思ひます。けれども其昔に買つた本を、今日迄まだ一度も眼を通した記憶がないのも慥かな事實ですから、私は希臘の神話に

かけては、あなたよりも遙かに無知識なのです。立派な序文の書けやう筈がありません。

御存じの通り私は英文學出身のものですから、高等學校在學の頃から歐洲文學の根柢に横はる二つの寶庫（聖書と希臘神話）をいつか機會を見て思ふまゝ熟覽して置きたいといふ希望を抱いてゐましたが、御恥づかしい事に、此機會は永久に多忙な自分の眼前に遂に出現せず済んで仕舞ひました。

私が高等學校にゐる頃同級生に松本亦太郎（今の文學博士）といふ人がゐました。此人は其頃熱心な基督信者でしたが、ある時私に、聖書を日に何頁づゝとか讀むと、丁度三年目に新舊兩約全書を通讀する事になるといつて、それを日課として毎日怠らず繰返してゐるやうでした。私は其話を聞いた時、たとひ私が耶蘇教徒でないにせよ、バイブルは文學上必要の書物だから、さういふ課程をこしらへて、長い間に通讀したら嘸有益だらうと思つて、既に遣り始めようと迄決心した事があります。然し好きな事にばかり夢中になり易い、又厭な事に始終追ひ懸けられてゐた其頃の私には、ついに夫すら果さずじまひに終りました。夫だから、私のバイブルに於ける知識は非常に貧弱なものです。さうして私の希臘神話に於る知識も亦これに劣らぬ程憐なものなのに過ぎません。

それがため學校を出て教師をしてゐる時分には、よく雙方の故事故典で悩まされました。仕方なしにバイブルのコンコードダンスを左右に置いたりクラシカル字彙といふやうなものを机上に具へたりして、何うか斯うか御茶を濁して通りました。甚だ切ない事でした。切ない許ならまだしも、時によると、馬鹿々々しくて腹の立つ事さへありました。

あなたが何んな動機から神話を譯して御覽になつたかはまだ解らないが、恐らく文學を研究する人の手引草として許ではないでせう。今の人の手にする文學書にはギーナスとかバツカスとかいふ呑氣な名前は餘り出て來ないやうです。希臘のミソロジーを知らなくても、イブセンを讀むには殆んど差支ないでせう。もつと皮肉にいふと、人生に切實な文學には遠い昔しのお話や故典は何うでも構はないといふ所に詰りは落ちて來さうです。あなたもそれは御承知でせう。それでゐてこんな夢のやうなものを八ヶ月もかゝつて譯したのは、恐らく餘りに切實な人生に堪へられないで、古い昔の、有つたやうな又無いやうな物語に、疲れ過ぎた現代的の心を遊ばせる積りではないで、古く昔の、もし左右ならば私も全く御同感です。其意味を面倒に述べ立てるのは大袈裟だから止めますが、私は自分で小説を書くとき其あとが心持が悪い。それで呑氣な支那の詩などを讀んで埋め合せを付けてゐます。夫から大病中徒然を慰めるため繪（繪といふ名はちと分に過ぎるから、繪のやうなものと云つた方が適切ですが）其繪を描いて遊んでゐると、矢張り仙人だの坊主だの山水だのが天然自然題目になります。是もある意味に於てあなたの神話に丹精を盡したと同じ動機になるのではありますまいか。弱い神經衰弱症の人間が無暗に他の心を付度して好い加減な事を申して濟みません。もし間違つたら御勘辨を願ひます。

最後に神様の名前の發音に就いて一寸申し上げます。あなたの發音法は大部分大陸讀方（コンチネンタル・メソッド）を用ゐられた様ですが、日本で云ひ慣らされたバツカスとかギーナスとか云ふのは英吉利讀にされたと見えますから其邊は一寸讀者に注意して置いて遣らないと悪いだらうと思ひます。夫から又羅甸讀にしてもクオンチチイを付けて發音しないで、のべつに羅馬字綴